

センター試験“衣替え”。「基礎」「発展」 2段階の「達成度テスト(仮称)」導入に!

「基礎」は学習指導、推薦・AO入試に、「発展」は一般入試に活用。
成績は“段階別”表示で、“1点刻み”による選抜から脱却!

旺文社 教育情報センター 25年11月1日

- 政府の「教育再生実行会議」(座長・鎌田薫早稲田大総長：以下、実行会議)は25年10月31日、高大接続や大学入試の在り方などを提言した『高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について』(第4次提言)を安倍晋三首相に提出した。
実行会議では25年6月上旬から、高校教育の質の確保と向上を図るとともに、大学の人材育成機能を強化し、大学受験生を総合的、多面的に評価する人物重視の大学入試への転換を図る改革を中心に検討、議論してきた。
- 今回の大学入試に関する提言では、高校段階における学習の到達度を把握し、高校の指導改善や大学入試に活用する新たなテストとして、“基礎レベル”と“発展レベル”からなる「達成度テスト(仮称)」の導入を基本に据えている。
- 「達成度テスト・基礎レベル(仮称)」は、高校在学中の学習到達度を測るテストで、指導の改善や学力向上などに役立てたり、推薦・AO入試に利用したりする。
「達成度テスト・発展レベル(仮称)」は、現行のセンター試験を“段階別評価”方式などに改編して、一般入試の基礎資格などに利用する。
いずれのテストも複数回の受験を可能にする仕組みを検討する。
- 大学ごとの個別試験(2次試験)では、「達成度テスト・発展レベル(仮称)」の積極的な活用とともに、知識偏重の学科試験一辺倒からの脱却を目指し、面接や論文、各種の資格検定、高校での活動実績など、受験生の能力、意欲、適性などを総合的、多面的に評価する選抜方法を促している。
- 新テストとして提起された「達成度テスト・基礎レベル(仮称)」は、中教審の「高等学校教育部会」の『審議の経過について』(25年1月)で報告された、高校段階の学習の到達度を把握する希望参加型のテスト(「高等学校学習到達度テスト(仮称)」)によるとみられる。また、テストの「複数回受験」や「段階別表示」については、旧・大学審答申『大学入試の改善について』(12年11月)のセンター試験の改善で「年度内複数回実施」や「一定の成績水準をみる資格試験的な取扱い」が提言されたが、実現には至っていない。
以下に、「達成度テスト(仮称)」を中心に、大学入試改革に関する提言の概要を紹介する。

■「達成度テスト・基礎レベル(仮称)」の導入

～ 学習成果や教育活動の把握・検証による教育の質の向上 ～

- 国は、基礎的・共通的な学習の達成度を客観的に把握し、各学校における指導改善や生徒の学習改善に活かすための新たな試験の仕組み（「達成度テスト・基礎レベル(仮称)」）を創設する。
同テストは、高等学校教育の質の確保・向上を目的として、高等学校の教育課程における基礎的・共通的な教科・科目について、生徒の多様な状況に応じ、高等学校在学中に複数回受験できる仕組みとすることを検討する。
- 「達成度テスト・基礎レベル(仮称)」の試験内容は、基礎的・共通的な教科・科目の学習達成度について、知識・技能だけでなく、その活用力、思考力・判断力・表現力等を含めた幅広い学力を把握・検証できるものとする。
同テストは、高等学校の単位及び卒業の認定や大学入学資格のための条件とはしないが、できるだけ多くの生徒が受験し、結果を学校や生徒に示すことにより、学校における指導改善や、生徒の学習意欲の喚起及び学習改善につなげる。民間の検定や各種試験との相互補完により、生徒の学習習慣の定着を図る方法も模索する。
- 以上の方針の下、「達成度テスト・基礎レベル(仮称)」の具体的な実施方法（教科・科目や出題内容等）や実施体制、実施時期、名称、制度面・財政面の整備等について、高等学校における教育活動に配慮しつつ、関係者の意見も踏まえ、中央教育審議会等において専門的・実務的に検討されることを期待する。
- 国及び地方公共団体は、ジュニアマイスター顕彰制度や職業分野の資格等も活用し、生徒の多面的な学習成果の評価の仕組みを充実し、生徒が進学や就職にも活用できるようにする。
- 学校は、教育活動の質を向上させていくため、自らの教育活動の成果等を不断に検証する学校評価を通じて、学校運営の組織的・継続的な改善を図るとともに、積極的な情報発信を行う。

■「達成度テスト・発展レベル(仮称)」の導入

～ 大学教育を受けるために必要な能力判定のための新たな試験 ～

- 国は、大学教育を受けるために必要な能力の判定のための新たな試験「達成度テスト・発展レベル(仮称)」を導入し、各大学の判断で利用可能とする。高等学校教育への影響等を考慮しつつ、試験として課す教科・科目を勘案し、複数回挑戦を可能とすることや、外国語、職業分野等の外部検定試験の活用を検討する。
同テストの運営については、大学入試センター等有するノウハウ、利点を活かしつつ、「達成度テスト・基礎レベル(仮称)」と相互に連携して一体的に行うようにする。
- 「達成度テスト・発展レベル(仮称)」は、その結果をレベルに応じて段階別に示すことや、各大学において多面的な入学者選抜を実施する際の基礎資格として利用することなど、知識偏重の1点刻みの選抜から脱却できるよう利用の仕方を工夫する。将来的には、試験問題データを集積しCBT方式で実施することや、言語運用能力、数理論理力・分析力、問題解決能力等を測る問題の開発も検討する。
- 以上の方針の下、「達成度テスト・発展レベル(仮称)」の具体的な実施方法（教科・科目や出題内容等）や実施体制、実施時期、名称、制度面・財政面の整備等について、高等学校における教育活動に配慮しつつ、関係者の意見も踏まえ、中央教育審議会等において専門的・実務的に検討されることを期待する。

■大学入学者選抜の改革・改善

～ 多面的・総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換 ～

- 大学入学者選抜は、各大学のアドミッションポリシーに基づき、能力・意欲・適性や活動歴を多面的・総合的に評価・判定するものに転換する。
大学は、これからの時代の潮流や社会の在り方を展望して、養成する人材像を明確化し、教育を再構築する。そして、それを踏まえたアドミッションポリシーを具体化し、オープンキャンパス等の機会を積極的に活用するなどして、大学入学後の教育プログラムとともに示す。
- 各大学が求める学力水準の達成度の判定には、各大学のアドミッションポリシーに基づき、「達成度テスト・発展レベル(仮称)」の積極的な活用が図られるようにする。
その際、利用する教科・科目やその重点の置き方を柔軟にするなど弾力的な活用を促す。各大学が個別に行う学力検査については、知識偏重の試験にならないよう積極的に改善を図る。国は、TOEFL等の語学検定試験やジュニアマイスター顕彰制度、職業分野の資格検定試験等も学力水準の達成度の判定と同等に扱われるよう大学の取組を促す
- 各大学は、学力水準の達成度の判定を行うとともに、面接（意見発表、集団討論等）、論文、高等学校の推薦書、生徒が能動的・主体的に取り組んだ多様な活動（生徒会活動、部活動、インターンシップ、ボランティア、海外留学、文化・芸術活動やスポーツ活動、大学や地域と連携した活動等）、大学入学後の学修計画案を評価するなど、アドミッションポリシーに基づき、多様な方法による入学者選抜を実施し、これらの丁寧な選抜による入学者割合の大幅な増加を図る。
その際、企業人など学外の人材による面接を加えることなども検討する。
- 推薦入試やAO入試における基礎学力の判定に際しては、高等学校における学習の達成度を評価するものとして、「達成度テスト・基礎レベル(仮称)」の結果の活用も可能とし、国は、各大学の判断による活用を促進する。また、推薦入試やAO入試の選抜及び結果発表について、高等学校教育への影響を考慮した適切な時期に行われるよう促す。
- 大学は、入学者選抜において国際バカロレア資格及びその成績の積極的な活用を図る。国は、そのために必要な支援を行うとともに、各大学の判断による活用を促進する。
- 大学は、社会人、留学生、障害者等の受入れや飛び入学等による多様な学生の受入れが進むよう入学者選抜の工夫を図る。
- 国は、メリハリある財政支援により、以上の取組を行う大学を積極的に支援する。
国及び大学は、大学入学者選抜の改革について、その成果を検証し、継続的な改善に取り組む。
公務員の採用においては、特に平成14年度以降、人物評価の重視に向けた見直しを図られてきており、引き続き能力・適性等の多面的・総合的な評価による多様な人材の採用が行われることが期待される。

- * 「達成度テスト(仮称)」の具体的な制度設計や実施時期、実施方法等については、今後、中教審で検討、審議される。
- * 当提言では、新たな試験(達成度テスト(基礎レベル)(仮称))／新たな試験(達成度テスト(発展レベル)(仮称))と表記されているが、ここでは、「達成度テスト・基礎レベル(仮称)」／「達成度テスト・発展レベル(仮称)」と表記した。
- * 次ページに「達成度テスト(仮称)」の“基礎レベル”と“発展レベル”の目的、機能・活用、試験内容等を整理した一覧を掲載。

●「達成度テスト(仮称)」に関する提言内容

名称 (仮称)	達成度テスト	
	基礎レベル	発展レベル
目的	高等学校教育の質の確保・向上、大学の人材育成機能の強化、能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価する大学入学者選抜への転換を図る改革を行う。その一環として、高等学校段階における学習の達成度を把握し、高等学校の指導改善や大学入学者選抜に活用する新たなテストとして導入	
機能・大学入学者選抜での活用	高等学校の基礎的・共通的な学習の達成度を客観的に把握し、学校における指導改善に活かす 推薦・AO入試における基礎学力の判定に際しての活用を促進	大学が求める学力水準の達成度の判定に積極的に活用 各大学で基礎資格としての利用を促進 利用する教科・科目や重点の置き方を柔軟にするなど弾力的な活用を促す
受験回数	高等学校在学中に複数回受験できる仕組みとすることを検討	試験として課す教科・科目を勘案し、複数回挑戦を可能にすることを検討
試験内容等	基礎的・共通的な教科・科目 知識・技能の活用力、思考力・判断力・表現力も含めた幅広い学力を把握し、指導改善につなげる 高等学校の単位及び卒業の認定や大学入学資格のための条件とはしませんが、できるだけ多くの生徒が受験	大学教育に必要な能力の判定という観点から教科・科目や出題内容を検討 知識偏重の1点刻みの選抜にならないよう、試験結果はレベルに応じて段階別に表示
試験運営	大学入試センター等が有するノウハウ、利点を活かしつつ、相互に連携して一体的に行う	

※ 具体的な実施方法や実施体制、実施時期、名称、制度面・財政面の整備等について、高等学校での教育活動に配慮しつつ、関係者の意見も踏まえ、中央教育審議会等において専門的・実務的に検討。

(政府・実行会議「第4次提言」(25年10月)の資料より作成)